



TITLE:

清代の郷村組織と地方文獻：蘇州洞庭山地方の郷村役を例にして

AUTHOR(S):

山本, 英史

---

CITATION:

山本, 英史. 清代の郷村組織と地方文獻：蘇州洞庭山地方の郷村役を例にして. 東洋史研究 1999, 58(3): 563-590

ISSUE DATE:

1999-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/155263>

RIGHT:

# 清代の鄉村組織と地方文獻

——蘇州洞庭山地方の鄉村役を例にして——

山 本 英 史

はじめに

一 『洞庭山禁革現總案』の世界

二 地方志が伝える鄉村社會

三 『太湖廳檔案』に見る鄉村役

おわりに

はじめに

いまから三〇〇年とは遡らない中國清代の鄉村組織はどのような制度の下で運営され、社會としての機能が維持されていたのか。この素朴な疑問に對していまに伝えられる史料はいかなる示唆を與えてくれるのであろうか。

周知のように中國には二十四史をはじめとする修史の傳統があり、歷代王朝がそれを踏襲した結果、膨大な編纂史料が蓄積されてきた。にもかかわらず、皇帝を頂點とする王朝集權體制の末端としての州縣、さらにその深層部である鄉村社會に關する情報は驚くほど少なく、それがこの分野における研究の進展を妨げてきた。試みに清代の行政制度全般を網羅した『清國行政法』によれば、里甲制度が漸次廢類に向かい、康熙四七年（一七〇八）に保甲制度が確立されてからは會

典に示されるように、一〇戸ごとに一牌頭、一〇牌ごとに一甲頭（甲長）、一〇甲ごとに一保長（保正）という警察および戸籍調査を主任務とする諸役がその行政を擔當したという。<sup>(1)</sup>しかしながら、里甲制から保甲制へという機械的な把握だけで清代の鄉村組織の實態はどれほど正確に理解されることになるのであろうか。それは各鄉村において様々な條件に規定され、必ずしも保甲とは重ならない、むしろ保甲とは別の制度によって運営・維持されていた所もあったことが推測できる。ではその別の制度とは何か。『清國行政法』はなお保甲長とは別に鄉村役に相當するものが存在し、それが後世に至るまで存続した可能性を示唆しているが、それについての系統的な説明はなされていない。<sup>(2)</sup>さらにまた今日に至るまでの研究蓄積においてもそれが十分に明かにされてきたとはいえない。<sup>(3)</sup>

ところで、近年、檔案と呼ばれる實際の行政に用いられた原文書の存在が陸續として明らかにされた結果、それらを利用した新たな研究が生まれつつある。中國の鄉村組織の研究においてはフィールドワークによる聴取調査という方法が有効な場合がある。だが、この二〇世紀の限られた視き窓からは類推できても實證できない時代の固有な制度のあり方については依然として文獻に論據を求めざるを得ないこともまた確かである。檔案をはじめとする地方文獻はまさしくその論據を提供するまたとない史料といつてよい。

本稿では以上の點を念頭に置きつつ、具體的には乾隆三二年（一七六六）に蘇州洞庭山地方の士人をも含む地元の民衆がそれまで度々廢止されては復活してきた現總という鄉村役の禁革、すなわち禁止したうえで廢絶することを求めたことにはじまる一連の處理過程を通じて清代における鄉村組織の實態の一端を明らかにし、併せてこのようなテーマについて研究する際に利用される地方文獻に對する留意點について附言したい。

なお、洞庭山とは江蘇省西南部に位置する太湖上に浮かぶ最も大きな二つの島をいう。一九世紀中頃に半島になった東の島を東洞庭山または東山と稱した。また、そこから少し離れた西の島を西洞庭山または西山と稱した。縣城から四〇キロメートル離れていたが、ともに蘇州府吳縣の所屬であった。<sup>(4)</sup>現在は吳縣市に屬し、國家一級自然風景區として蘇州郊外

の觀光地のひとつとなっている。<sup>(5)</sup> 本稿はここを舞臺に展開していく。

# 一 『洞庭山禁革現總案』の世界

發端は乾隆三十一年（一七六六）二月三日に西山の士民鳳鳴徵、葛嘉謨、秦允周、蔡惟馨、徐景能、鄭文阜、蔣惠嘉、鄭中衡、吳龍光、朱廷光等が連名で「現總」の存在を再び禁止して民害を永遠に除くよう江蘇巡撫明德に上呈したことにあ  
る。以下はその全文である。

思いますに、洞庭山は太湖の真中にあり、士農工商はそれぞれ生業に安んじています。以前には縣蠹や地匪が規則に反して現總の名目を設け、住民に害を及ぼしていました。そこで康熙三〇年、士民費爾廉等が現總を禁革せよとの康熙年間の恩旨を恭受して各官憲に要請しました。それはすでにご承知の通りです。碑文が府署に刻まれていますので、その寫しを提出いたします。また乾隆二十一年に里民孔興蒸等が前任巡撫の莊有恭に要請して、その決裁を受けました。その抄録を提出いたします。ところが思いもよらないことに時が経つにつれて弊害が生じてきました。近年では胥蠹の中に地匪と共謀し、なおも規則に反して現總の名目を設け、住民に累を及ぼすのがいます。彼らは「官と現總に充てられた民との」間に立ってその役割を代行し税糧を侵蝕するので、民は税糧の二重拂いに苦しんでいます。

また「現總に充てられた民からその」役費を苛酷に取り立て、なにかと問題を起こしています。そのうえ洞庭山の住民は行商人が大半で、家には女子供がいるだけです。共謀した差役は「民を」脅したり騙したりして當番を割り當てます。十甲が年ごとに順に擔當し、「未納税糧が生じれば、その」税糧を辨償して納税確認を受けることとなります。

田舎者の民は恐ろしくなり、膏血を絞る銀を補填して「現總の任務を他人に」代行してもらいます。その代金は圖ごとと甲ごとに銀六、七〇兩にもなります。これらの胥蠹や地匪は代行で得た金を山分けしており、殺人や盜難などの事件が起これば必ず面倒を起こします。現總の年番に當たった家ではひとたびこの酷い害に遭うと、一家が崩壊してし

まいます。さらに巡司や胥役が絶え間なく騒ぎを起こします。いろいろな積弊害民のことは挙げたらきりがありません。ただ、嬉しいことに閣下におかれましては東南の地を危険からお守り下され、民の苦しみをお心にかけていただいております。それゆえ巡撫の門を叩き、不法に現總の名目を設けるのを禁止することを重ねて厳しく通達していただく旨、懇願する次第です。税糧については地總に責任を負わせ、實存の戸に基づいて納税を督促させます。殺人や竊盜事件については兩鄰りに責任を持たせ、捜査・舉報を行わせれば民害は永遠に除かれ、胥蠹や地匪〔の横暴〕も跡を絶ちます。重ねて新たに石に刻み、永久に遵行することをお願いいたします。善政が山河とともに變わることなく、恩澤が太湖とともに盛んに流れれば、萬民は徳を戴き重ねて祀り、累世美名を遺すことになります。

これは次のように要約できる。すなわち、「洞庭山地方ではかつて胥吏や地匪が規則に反して現總という鄉村役の名目を設け、それを口實にして住民を苦しめていた。そのため康熙三〇年（一六九一）に費爾廉等の要請があり、巡撫鄭端の現總を禁革する命令が關係部署に通達された。また乾隆二十一年（一七五六）に孔興蒸等が前任巡撫の莊有恭に上呈し、その決裁を受けた。ところが、近年その弊害が復活したので再び現總の禁革を巡撫に要請する。現總廢止に伴う受皿として、徵税は地總の責任で、治安は兩鄰の住民の責任でそれぞれ行わせることを提案する」というものである。これは三日後の二月六日に江蘇巡撫明德から蘇州府に通知され、検討する旨の回答を得て受理された。

右の一文は『洞庭山禁革現總案』と稱する書に收められている。これは乾隆年間、一八世紀中頃に地方政府によって刊行された政書に分類されるもので、上海の復旦大學圖書館特藏閱覽室が所蔵している善本の一つである。前半の『洞庭山禁革現總案』三七帖と後半の『洞庭山禁革現總碑案』一四帖とを併せて一種二冊の書として編集されている。<sup>(6)</sup> 編者として巻頭に蘇州府知府申夢璽、署理太湖督捕水利分府張圖書、吳縣知縣吳鉞の三名が名を列しているが、序文がなく、刊行目的や背景について明言はないものの、在地社會の貴重な情報を提供しており地方文獻としての價值は小さくない。筆者の知る限り復旦大學圖書館以外に所蔵する機關はなく、中國においても珍しいものと推測される。<sup>(7)</sup>

引用した鳳鳴徴らの上呈はその冒頭に收められているが、それに續く關連文書は以下の通りである（文書の名稱は適宜簡略化したものを除けば原則として表題に従った）。

○署蘇州府正堂解〔韜〕爲積弊復萌等事〔二月三日〕 ○憲治吳縣三十五都不等圖糧里士民鳳鳴徴等具呈爲憲澤民蘇環請申詳永除積弊事〔二月三日〕 ○署理江南蘇州府正堂海防分府解〔韜〕爲積弊復萌環吁示禁永除民累事〔二月三日〕 ○臺治三十五都不等圖糧里士民鳳鳴徴等具爲環叩詳禁除弊安生事〔二月一六日〕 ○吳縣爲積弊復萌環籲示禁永除民累事〔三月一一日〕 ○蘇州府爲積弊復萌環籲示禁永除民累事〔三月一八日〕 ○憲治吳縣糧里士民鳳鳴徴等具呈爲憲造萬民環請勒石恩流千古事〔四月四日〕 ○江蘇按察司蘇州布政司爲積弊復萌等事 ○欽命江南蘇州等處承宣布政使司布政使蘇〔爾德〕爲積弊復萌等事〔五月二〇日〕 ○江南江蘇等處十一府州提刑按察使司按察使李〔永書〕爲積弊復萌等事〔五月二五日〕 ○特授江南蘇州府正堂申〔夢璽〕爲積弊復萌等事〔五月一七日〕 ○江南蘇州府吳縣爲積弊復萌等事〔六月二日〕 ○特授江南蘇州府正堂申〔夢璽〕爲積弊復萌等事〔六月一日〕 ○憲治吳縣士民鳳鳴徴等呈爲環請撰文勒石永禁恩垂不朽事〔六月一日〕 ○吳縣士民鳳鳴徴等呈爲捧批再呈叩順輿情事〔六月三日〕 ○特授江南蘇州府正堂申〔夢璽〕爲積弊復萌等事〔六月二六日〕 ○特授江南蘇州府正堂申〔夢璽〕爲積弊復萌環籲示禁永除民累事〔六月二六日〕

結論からいえば、要請内容はその後若干の修正が加えられ、同年六月に次の諸點の實行が承認された。①錢糧の催辦と犯人の逮捕は事情に通じた在郷の地總の專任とする。②郷村の雜務は圖ごとに置かれた營兵が擔當する。③殺人や竊盜の重大事件については該當する圖の地總が營兵と協同して調査報告に當たる。④今後地總が非合法に現總の名目を設け、遊棍や匪徒がその代行をしたり、巡檢や弓兵が縣の胥役と結託し公の名に借りて問題を起こしたり、在城の地總が非合法な雜役の割り當てを強要したりすることを嚴禁し、職務怠慢の查察官は處分する。⑤その内容を刻んだ石碑を府署に建てるのみならず、洞庭西山の住民の捐金によって府署に加えて縣署と洞庭山公所の合計三カ所に設置する。

さて、以上の事實からどのような郷村組織の實態が浮かび上がってくるのであろうか。現總を理解するためには、ま

ず、その前身である經催について觸れておかねばならない。經催とは本來は里甲正役の一部であつた錢糧の催辦、すなわち徴收と納入の役割が就役負擔の輕減を目的として明末に分化・獨立したもので、江蘇では廣く用いられた名稱であつた。もっともそれは康熙元年（一六六二）に巡撫韓世琦が均田均役法の施行を命じた際に併せて革除されたことになつた。<sup>(8)</sup> また、康熙二十三年（一六八四）に總督于成龍が、里甲制的徭役の存在そのものが人民の破産と流亡を招くとともに請負代充の溫床になつてゐるとの理由により里排（里長・排年）を禁絶したことから、鄉村役は名實ともに消滅するはずのものであつた。<sup>(9)</sup>

ところが、蘇州府知府盧騰龍の康熙三〇年（一六九二）一〇月二十九日附の告示に引く生員費爾廉ら一〇餘名の連名による呈詞には、禁絶後もなお存續する經催の姿を傳えている。費爾廉らはまず、「田産があれば税糧を納めることに變りはない。洞庭山は湖心に位置しており、住民は「縣城まで」遠出して納税するので「納期に」間に合わせる事ができない。そこで經催の設立を唱えた」と述べ、經催が當地で復活していたことを證言している。そして、さらに「時が経つにつれて弊害が生じ、ついに圖蠹が「經催の役割を」代行し、畝ごとに二兩から一・五兩の請負費を求めるようになった。これまで經催は徴税を擔當するだけで、刑事事件や臨時の夫役には關與しなかったが、殺人事件などが起これば喜んでうまい汁を吸うようになった。そこでついに名を現總と改めた。彼らは郷曲に武斷し、ひとたび徴税業務を請負代行すれば、集めた錢糧は未納・侵蝕しないものではなく、民は毎年二重に納税することになる。貧者が厳しい査察に遇うと子供を賣らなくてはならなくなる。現總の害は骨髓を痛刺するものである」といい、洞庭山の鄉村役は、徴税に業務が限られた經催から警察や雜役をも含めた業務を非公認で擔う現總へと進化し、それが圖蠹らの利藪になつてゐることが縷説されてゐる。<sup>(10)</sup>

また、雍正二年（一七二四）一〇月に西山の住民によって建てられた碑文に見られる吳縣知縣楊紹の告示には、「吳縣は康熙二〇年以後、錢糧についてはすべて花戸甲徴冊を設けて納税戸を個別に督促することになり、當年の名目は廢止されて久しい。吳縣所轄の五一里みなそうであり、全く民の迷惑となつていない。ただ洞庭西山だけは湖畔の邊鄙な所にあ

り、舊習がまだ残っているであろう」とあり、西山ではなおも年番としての當年、すなわち現總が存續していたことを傳えている。<sup>(11)</sup>

さらに、乾隆二十一年（一七五六）十一月、蘇州巡撫莊有恭の批によれば、「經催・現總・里排の名目がすでに久しく禁止されていることはすでに承知の通りである。それなのに吳縣の胥吏はどうしてなおも敢えて法を犯して騒ぎを起こすのか。所轄の府や縣が胥吏の指圖に任せているのも理解できない」とあり、在地の郷村役の名目がなおも存續していたことが確認できる。<sup>(12)</sup>

鳳鳴徴等の乾隆三十一年（一七六六）の上呈で問題とされた現總はこれらの役割をすべて繼承していた。それはまた幾度かの禁令に堪えてさらに七〇年以上も維持され續けた慣行でもあった。このことから、現總とはおよそ次のようなものと見なすことができる。①職責は、經催が錢糧の催辦に限定されていたのに對し、警察や臨時雜役割當の業務をも含み、往時の里甲正役のそれに近いものであった。②存在自體は里甲制的徭役の名目に由來するものの、當時の制度にあっては非法であり、行政府からは一切の權限が委ねられていなかった。③にもかかわらず、西山にあっては實態として存在し、年番の形式さえも維持されていた。要するに明末に出現した里甲制解體に伴う流動化現象が、一〇〇年以上經過した清代中期に至っても特定の地域において繼續しており、一般に認識されている制度とは異なる機構の下で事實上の郷村組織として機能していたことが知られるのである。

それでは洞庭山地方の住民は現總を廢止することによってどのような結果を望んだのであろうか。現總の存在はやはり弊害として受け止められたと思われる。それが直接の原因で家庭が崩壊してしまうといった報告はその實情を傳えている。住民みずからが費用を據出してまで三カ所に石碑を建てることを望み、現總廢止の約束を不變のものにしようとしたのもそれを裏づける。しかしながら、彼らが問題にしたのは郷村役そのものというよりはむしろ里甲制的徭役に根據を持つ現總の存在であった。その存續は住民にとって年番割當の慣行が守られ、それを名目とする代行費の支拂いが果てしな



く強要されることを意味した。従って彼らはその根據を絶ち、地總にその權限を委譲することを求めたのである。ならば地總とはいかなる基盤を持つ郷村役であり、住民が彼らに期待したものは何であったのか。『洞庭山禁革現總案』はその點について多くを語らないため、勢い他の地方文獻の助けを借りざるをえない。中國全體から見れば些細なものでも洞庭山地方の住民にとっては大問題であったこの顛末は地方文獻ではいかに扱われているのであろうか。

## 二 地方志が伝える郷村社會

地方社會の制度を知るためには地方志に當るのが正攻法であると考えられている。それゆえまず地方志に依據してこの問題がどのように扱われているのかを見ることにしよう。

道光四年（一八二四）に刊行された『蘇州府志』は康熙三三年（一六八四）の江南總督于成龍による里排の禁革後における蘇州府一般の郷村役について次のような情報を提供している。<sup>(13)</sup> まず雍正二年（一七三四）に圖書を嚴革し、清書と保正を設立したとある。つぎに乾隆十一年（一七四六）にその清書を散撤し、莊書を設立したという。圖書とは里排の廢止後においてもなお在地の冊籍管理の必要上設けられた書算業務に携わる役の一種であったが、その圖書を廢止したことによって「民累はことごとく除かれた」という。その後設けられた清書は、同志の割註に據れば「徵稅冊を作成して易知滾單を分給する」役割を、保正は同じく割註に據れば「圖中の一應の役務を任ずる」役割をそれぞれ擔ったことが知られ、これらは順莊法施行下において新たに設けられた郷村役であった。清書の役割が徵稅冊の作成と納稅通知書の配布に止まったのに對し、莊書は徵稅冊に加えて土地臺帳をも作成した。莊書が設けられたのは順莊法の改良型である版圖順莊法に村落組織を改革したことに伴うものであったという。<sup>(14)</sup>

この記事は續く同治十三年（一八七四）に編修され光緒八年（一八八二）に刊行された『蘇州府志』にも加筆のないままに踏襲され、<sup>(15)</sup> 民國『吳縣志』をはじめとする蘇州府管轄諸縣の多くの地方志においてもまた徭役についての記載の下敷

きとなった。<sup>(16)</sup> それゆえ、これは蘇州地方の里甲制解體後における郷村役について述べた、いわば公式報告と見なしてよい。

ではこれは上述した洞庭山地方における郷村役の改革の實態とどのように結びつくものなのか。少なくとも『蘇州府志』の記載が府下の郷村における諸状況を正しく傳えている限り、それは洞庭山地方の状況と全く無關係ではありえないはずであるが、記載はこれに止まり、地總と保正との關係など手掛かりとなりうる情報を提供していない。

一般的にいつて清代の地方志の徭役についての記載は簡略に過ぎる感がある。その原因として二つのことが考えられる。第一は清代の地方志が明代のものに比べて徭役という項目にあまり紙数を割かなくなったことである。これは地丁併徴に至る明末清初の役法改革の結果、丁税の廢止をもって徭役の消滅と見なし、以後の徭役の記載は簡略ないしは省略される傾向にあったことに一因があると思われる。また、現實の郷村にあるいは役的なものがあつたとしても、「みな自分で志願して引き受けたものであり、時に奸劣な者が役割當ての名に借りて小戸を需索することがあつても、その實、徭役とは關わらないため、ここでは一緒に載せることをしなかった」<sup>(17)</sup> などという記載が乾隆以後に刊行された地方志には少なからず見え、郷村役は徭役の對象からはずされてしまったことが擧げられる。第二は地方志の編者の關心に由來するものである。『清國行政法』は清代の地方行政のあり方について、「州縣官たる者、其名は親民官と云ふと雖も其實は人民を視ること猶ほ路人の如く、私利を營むに汲汲として公益を顧みざる者、比比として皆然るの狀なりしが故に、其結果として地方人民は共同自衛の必要上、官府の力に依頼せずして一郷村の共同事務を辦理するの組織を見るに至りしなるべし。郷村制度の性質果たして此の如しとせば、其制度たるや實際上の必要よりして起これるものにして政府の施設と相關せず。是れ其保甲と異なりて會典則例等に何等の規定なき所以なり」<sup>(18)</sup>（原文は句讀點なしの片假名表記）という。このことは爲政者のみならず地方志を編纂する際の地元士大夫一般にも當てはまる。王朝支配と直接に關わらないとみなされるようになった郷村の諸状況に對して彼らが關心を抱かなくなつてしまつたことが地方志に記載を遺さない一因を作つてゐる。<sup>(19)</sup>

府志や縣志といったオフィシャルな地方志において洞庭山地方の郷村役についての情報が得られないのであれば、洞庭

山地方そのものについて個人が語った地方文獻に目を向けるのが次善の策となる。乾隆一五年（一七五〇）に東山の金友理が太湖周邊の狀況を地方志の體裁に倣って著した『太湖備考』という書は、地域に密着した具體的な情報を記録している。著者は康熙年間（東山の名族に生まれ、長じて吳萊庭の門下に入って經世致用の學を修めた在野の知識人であった。

『太湖備考』は乾隆一二年（一七四七）における綿密な實地調査に基づいて作成したもので、全一六卷三四項目が列擧されている。<sup>(20)</sup> その田賦の項に附された「東西兩山禁革當年現總牌」なる一文によれば、「清朝が弊害を革めるに及んで善政

は府志や縣志に詳らかなので、歴代の役制についてはここでは載せない。ただ當年・現總の名目は東西兩山においてはなおトラブルになっていたので、士民が巡撫に禁止を要請した。三基の碑が建った事情をここに節録して参考に備える」とあり、<sup>(21)</sup> 康熙三〇年（一六九一）に蘇州府知府盧騰龍が總督傅臘塔に東山の現總を禁革することを求めたこと、<sup>(22)</sup> 雍正三年

（一七二五）に吳縣知縣楊紹が府に西山の當年・甲首を禁革することを求めたこと、<sup>(23)</sup> 雍正四年（一七二六）に吳縣知縣冉

琪が府に東山の當年・現總を禁革することを求めたこと、の三件を記し、それぞれの碑文を節録している。①に節録された總督傅臘塔の批は『洞庭禁革現總碑案』所收の「遵奉旨憲禁革現總碑」の内容と同じである。②に節録された文面は

「洞庭西山禁革現總碑」のものと一致する。<sup>(22)</sup> ただし、當年・甲首と現總との區別が明確ではなく混同がある。③は西山の

例に照らして當年・現總の禁革を要請したもので、内容は「洞庭西山禁革現總碑」とほぼ一致している。以上は康熙三〇年（一六九一）と雍正二年（一七二四）の改革を裏づける記事であるが、同じく『太湖備考』には、「造冊散單の業務の必要から經造（地總とも稱した）を設け、未納戸の摘發・督促を行わせた。經造は助役公田から租米と糧戸が所有田畝數に應じて出資する手當てを工食とした。圖中の錢糧業務は經造の專管になり、糧戸と無關係になった。だが、時が経つにつれて當年・現總の舊名を持ち出して鄉民を騙す者が出てきたため、康熙三〇年と雍正三、四の兩年に東西兩山の被害住民が訴えて當年・現總の名目を禁革する旨の碑文が建てられた。乾隆一二年に太湖水利同知高廷獻が再び禁令を出した。また、乾隆一四年には後任の黃昉が碑を建てることを認めたが、彼の病死によって實現には至らなかった」という、より重

要な内容が記されており、地總についての新たな情報を提供している。<sup>(23)</sup>これによると、地總は經造とも稱し、現總が完全に廢止される以前から造冊散單專業のために設けられたものであったこと、また、無給の鄉村役でなかったことが判明する。ここでいう助役公田とは明嘉靖二十七年（一五四八）に吳縣知縣宋儀望が設置したのに始まり、吳縣では慣例として繼續されていたもので、乾隆一五年（一七五〇）現在においては二八都八九畝餘、二九都上扇一四八畝餘、二九都下扇一六一畝餘、三二都一六〇畝餘、三四都二〇五畝餘、三五都一七畝餘が計上されている。また、東山二八都二圖では貼役田三〇畝が設けられており、それは明末の里人吳鵬程が提唱したのに始まり、清朝が當年を革除して以來、歷代經造の收租に委ねられ、田を寄附した人戸においては貼役錢が免除されたといわれる。<sup>(24)</sup>

地總はその後どのような制度的變遷をたどるのであるか。その點については太湖周邊の環境を等しくする縣の地方志の中でごく稀ではあるが鄉村事情について觸れたものが若干役に立つ。以下、それらの記事に應援を求めよう。

一つは府城の南、洞庭山地方の東に位置する吳江縣の場合である。この地方の鄉村役については、乾隆一二年（一七四七）に刊行された『吳江縣志』にいくらか記載が遺されていることが既に知られている。<sup>(25)</sup>すなわち、雍正四年（一七二六）

に吳江縣知縣徐永祐が版圖法を採用し傳催を禁革して版圖經造を選定したことの按語には、里排禁革後に設けられた傳催とそれが兼充する扇書を廢止し、別途冊書を指定して經造と名づけ、納稅通知書の配布と納稅行爲の確認を行わせたことなどが述べられている。また、光緒五年（一八七九）に刊行された『吳江縣續志』には、同治五年（一八六六）に知縣沈錫華が經造を禁革した際の報告には、「經造の一役はかつて冊串を管理・作成し、稅糧事情を了解して納稅戸を特定するために設けられた。本來は地總といったが、道光初年に石に刻んで永遠に禁止したため、ついに經造と改名した。……ただし、後の經造はすなわち先の地總である。「地總を」禁革した時においてその名目を取り去ったに過ぎない」とある。<sup>(26)</sup>

ここから見れば、地總とはすなわち雍正四年（一七二六）の傳催廢止に伴う受け皿として設けられ徵稅冊の管理・作成と納稅督促業務を任せられた經造の前身であり、さらには經造と本質的に變わらないものであると認識される存在であったこ

とが知られる。

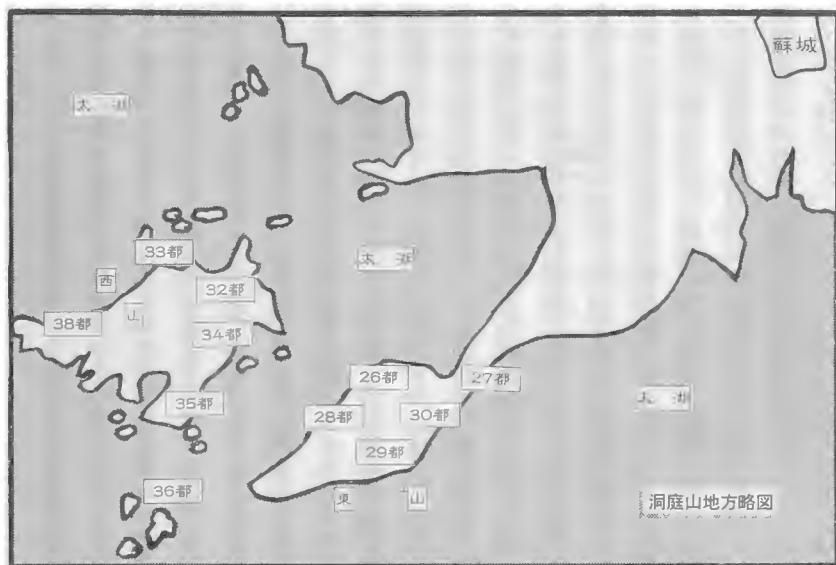
いま一つは府城の北西、洞庭山地方の北に位置し、常州府屬ではあるが同じ太湖に鄰接した地方である無錫縣の場合である。この地方の鄉村役については、光緒七年（一八八一）に刊行された『無錫金匱縣志』に次のような少し詳しい記載がある。<sup>(27)</sup>すなわち、康熙初め、經催が廢止された結果、錢糧の催辦は次第に經催とともに里甲正役から分化した總甲に移るようになり、それを現年總甲と稱した。そもそも業戸は差徭に熟練せず、生員・監生は通例就役しないので人を雇って代辦させることになり、それを包總と稱した。しかし、包總が失踪すると、現年總甲に本來充てられている正戸が捕らえられて厳しい検査を受けることになり、また胥役の誅求や雜役の過重負擔など、弊害が多くなった。嘉慶六年（一八〇一）、現年總甲を禁革することが求められたが、その状況は變わらなかった、というものである。そして幾度かの紆餘曲折を経た後の道光二六年（一八四六）、巡撫李星沅が着任した際、鄉紳の直訴によってはじめて現年總甲や包總などの名目が永遠に革除され、地保が新たに設けられることになった。地保は各圖の土民の中から誠實かつ有能な者を公舉することによって選ばれたという。無錫縣では里甲制的徭役の性格を残す現年總甲を道光二六年になってようやく廢止し、その受け皿として地保を任用して錢糧の催辦やその他の鄉村業務を委ねるようになった事實が窺われる。

重ねて求めるとすれば、それは嘉定縣の場合である。嘉定縣は清代においては太倉直隸州の屬縣の一つで、光緒十一年（一八八五）に刊行された『嘉定縣志』には、この時代の地方志にしては珍しく徭役についての詳しい解説が施されている。<sup>(28)</sup>それによれば、雍正四年（一七二六）、知縣趙向奎が、版圖法の施行に伴いそれまでの里書（收糧を五年ごとに擔當）、塘長（漕河を一〇年ごとに擔當）、保正（地方の稽察を一〇年ごとに擔當）からなる排年制度を革め、圖ごとに田多者二名を選んで冊書とし、催糧、漕河ならびに地方の稽察業務を任せたとする。冊書にまた實力の伴わない小戸が當たり支障を來すようになったことから雍正十二年（一七三四）に知縣程國棟により冊書が革められ、圖ごとに田多の大戸を選んで郷地にしたとある。郷地は最初督夫漕河のことのみを擔當するにすぎなかったが、やがて地保の名稱の下に保正の業務をも兼ねるよ

うになったという。

これら三つの周邊地方志の記載により、洞庭山地方の現總が禁革されて當地の村落行政を擔うようになったといわれる地總の制度的な輪郭がおぼろげながら明らかになる。すなわち洞庭山地方の地總とは、吳江縣の經造もしくは地總、無錫縣の地保、嘉定縣の鄉地もしくは保正をも兼ねた地保と呼ばれた鄉村役と系譜を同じくするものであったと見なされる。いずれも明代の里甲正役から派生・分化した錢糧催辦の役（洞庭山地方では經催といい、吳江縣では里排、無錫縣では經催、嘉定縣では里書とそれぞれ稱した）が、康熙年間の制度改革によって廢止されたのち、必要に応じて設けられた新たな鄉村役（洞庭山地方では現總といい、吳江縣では傳催、無錫縣では現年總甲、嘉定縣では冊書とそれぞれ稱した）がなおも後役的性格を遺し、そのための就役困難や不法請負を伴ったことによる弊害を一掃しえなかつたため、ついに輪番制に基づかず、これまで實態として業務を擔っていた人間をもって村落行政を擔當させるに至ったという、ある種共通の過程をたどっていることが確認できる。

そもそも地保とは何か。これまでの一般的理解においては、捕盜、糾察とともに徵稅、攤派等の負擔配分の補助機關として清代、とりわけ清末においては南北を通じて廣く分布した鄉村役であり、地方によっては保甲の長であったり、必ずしも保甲とは重ならない獨自なものであったりと様々なケースが考えられるとされ、<sup>(29)</sup>「官の威を假りて人民に諸種の弊害をもたらし存在<sup>(30)</sup>」ないしは「糧戸より陋規を需索してその一部を書吏・衙役に饋送する存在<sup>(31)</sup>」として、とりわけ一九世紀においては民衆に對して弊害をもたらし「惡役」のイメージが定着している。ならば洞庭山地方の地總もまたそのような地保と同じものであったのか否か。地總とはどんな名前の人間がそれに當たり、どんな言動を示したのか。そしてそれぞれの鄉村社會においていかなる存在であったのか。このようないわば地總の素顔とでもいべき面についてはいわゆる檔案が獨自の役割を發揮することになる。



### 三 『太湖廳檔案』に見る鄉村役

幸いなことに日本の國立國會圖書館には『太湖理民府文件』と題する、まさしく本稿で取り上げる洞庭山地方そのものに關する檔案が遺されている。<sup>(32)</sup>この檔案についてはすでに夫馬進氏による詳細な解説があり、<sup>(33)</sup>本稿でも氏の命名に従ってこれを『太湖廳檔案』と呼ぶことにする。

太湖廳とは蘇州府所屬の散廳のひとつであった。本來吳江縣同里鎮にあった水利を専門とする太湖同知が雍正十三年（一七三五）に洞庭東山に移駐され、その地方の民政をも統括することになった結果、これまで屬していた吳縣から獨立した。以來、宣統三年（一九一）に廢止されるまで一七六年間にわたって東西二山は「太湖撫民府」もしくは「太湖理民府」の名によって管轄されることになった。その役所で保管され、その後何らかの徑路で日本に傳わった文書がすなわち『太湖廳檔案』である。

ところで、清代の檔案には大きく分けて二つの系統がある。

一つは皇帝の上諭、内閣や軍機處の指令、中央および地方の官僚の上奏など、清朝の集權行政において實際にやり取りがなさ

れた書類として紫禁城に代々保管され、現在その大部分が北京の中國第一歴史檔案館および臺北の故宮博物院（さらには中央研究院歷史語言研究所）に所藏されているものである。これを便宜上「中央檔案」と呼ぶ。もう一つは地方の行政機關が發行した文書で、一部はなお中國第一歴史檔案館が所藏するものの、大部分は全國各地の檔案館に分散所藏されているものである。これを便宜上「地方檔案」と呼ぶ。<sup>(34)</sup>

中央檔案の中で地方文獻として活用できる代表は『宮中各處檔案』と『軍機處檔案』である。『宮中各處檔案』は宮中の各種の檔案をいい、硃批奏摺、官員履歷單、奏事處檔案の三つに大別される。このうちの硃批奏摺は地方行政の様々な問題を逐一中央に報告する義務を負った總督・巡撫から布政使・按察使に至る省級以上の地方高級官僚を中心とする上奏のオリジナルであり、康熙朝以降の地方社會の情報を提供している。現在、北京に約五〇萬件、臺北に約一六萬件が残されており、このうち本稿で最も關連のある乾隆朝の漢文奏摺に限れば北京の二萬三千餘件に對して臺北は五萬九千餘件を有している。北京では硃批奏摺をテーマごとに一八類に分けて目錄を作成しており、その一つである内政類の「保警」は保甲、戸口調査、無賴の捜査、消防、風俗・治安の維持、および光緒末年に始められた警察行政などに關わることでありとされる。<sup>(35)</sup>臺北の分は現在『宮中檔乾隆朝奏摺』として年代順に配列・影印されたもの七五輯がすでに刊行されている。<sup>(36)</sup>他方、『軍機處檔案』とは雍正七年（一七二九）以來の軍機處の文書であり、このうちの「軍機處錄副奏摺」は軍機處が毎月京内外官僚から來る奏摺を受け、皇帝が硃批を與えた後、逐次抄寫し半月ごとに一つの袋に入れて保存した文書で、硃批奏摺と相互補完する役割が期待できる。乾隆朝に限れば、北京に約一八萬件、臺北に約五萬件がそれぞれ所藏されているといわれる。<sup>(37)</sup>北京では、硃批奏摺と同じく一八類に分けられる。また、『乾隆朝漢文錄副奏摺地區檢索目錄』という七八冊からなる地區分類の目錄（うち江蘇は二四—三〇冊）があり、地域に即した檢索を可能にしている。

さて以上のような膨大な數を誇る中央檔案においては乾隆年間洞庭山地方における鄉村役のことはいかに語られているのであろうか。結論からいえば、期待に反してそれは何も語られていないことになる。たしかに總督・巡撫および布政



使・按察使を中心とする高級官僚は管轄地域内の状況について逐一皇帝に報告するのが義務であり、乾隆期の中央檔案もまたそのような上奏で満たされている。しかしながら彼らが定期的に報告するおびただしい数の「地方情形摺」のどれを取っても天候やそれに左右される作柄のことに終始し、その他の政治報告にしても、それが國家支配に直接關わらないものであれば例外なく具體性を缺き、雍正期の硃批奏摺に見られたような緊張感が傳わってこない。さすがに乾隆二二年（一七五七）における「州縣編查保甲」の皇帝の命令に對しては、<sup>(38)</sup>各省から反應が示されたが、例えば「保甲を編查し、匪類を稽査することは各省みな既に奉行しておりますが、「保甲冊を」編造することは相當に面倒で稽査がむしろ疎かになってしまいます。甲長は怠慢かつ無責任で、門牌もまた形骸化しております」<sup>(39)</sup>という保甲の普及の困難性が指摘されるだけで、在地において治安維持などがこれまでどのように行われてきたかといった具體的な報告はほとんどなされていない。その原因としては、地方において安定した支配が確立され中央で問題にするような事件が起こらなくなったと思われること、地方官僚の狀況報告がルーティン化してしまい雍正期のような皇帝による嚴しいチェックを受けなくなったことなどが考えられるが、前述のような地方志編纂の際における士大夫の在地の出來事に對する無關心と同様の意識が地方官僚にあったことも見逃せない。それゆえにまた蘇州郊外の鄉村役の狀況など、餘程のことがない限り奏摺にその形跡を止めるには至らなかつたのである。<sup>(40)</sup>

これに對して『太湖廳檔案』はもう一つの系統である地方檔案に屬する。地方檔案の中でつとに有名なのは四川省檔案館に所屬する『巴縣檔案』である。それは乾隆二二年（一七五七）から宣統三年（一九一）に及ぶ一一萬三千卷からなり、現在確認されている限りで年代が最も古く數量が最も多い清代地方檔案として知られている。『太湖廳檔案』は『巴縣檔案』のように大部なものではなく、また時代を通じて體系的に残っているものでもない。しかし、清代の洞庭山地方の情景を現在に傳える唯一の檔案であり、地域に即した獨自のミクロな世界を描き出している點で極めて貴重である。これまでその存在についてはいろいろな所でしばしば言及されながらも、それを利用した研究は夫馬進氏のものを除いてほと

んだといつてよい。(41)

『太湖廳檔案』は三一件四九八枚からなっているが、このなかでとりわけ本稿にとって有用なのは第一一件以下の裁判・訴訟文書である。それは三件を除いて事件に關つた地保を具體名で示した文書であり、そこから一九世紀後半の洞庭山地方における鄉村役の實態を垣間見ることができる。以下、順を追つて地保の登場する文書を紹介していこう。

【A】西山三五都一一圖徐巷に住む民人周晉卿が同都一二圖徐巷に住む民人龔正林に對し、給金を使い込んだことを理由に龔正林が周の荷物を差し押さえたとして訴えた案件【第一一、同治八年（一八六九）二月】。ここでは陸明祥と沈在明という二人の地保が登場する。陸明祥は、「龔正林の染坊店は私どもの管内にあります。龔正林の店員である周晉卿が給金を使い果たし、缺損分を横領したかどうかはわかりません」といい、また沈在明は、「周晉卿の住まいは私どもの管内にあります。彼は龔正林の店で働いています。彼が給金を使い果たし缺損分を横領したかどうかは私は全くわかりませんが、素より分をわきまえ悪いことをする者ではありません」といった旨の供述をそれぞれ残している。原告と被告とそれぞれが住む一一圖と一二圖の地保が證人として召喚されており、彼らは事件そのものの事情は知らないまでも、管内の人閑については十分な知識を持っていることが窺われる。

【B】東山二九都一九圖潦涼に住む民人宋惟勳が同都五圖金灣に住む姜鳳林等に對し、彼らが集團で暴力を振るつたとして訴えた案件【第二二、同治九年（一八七〇）七月】。ここでは陶正裕という地保が裁判に召喚されている。

【C】太湖廳の皂役郭鳳による三〇都六圖の地保姚永昌の行狀についての報告書【第三三、同治九年（一八七〇）十一月】。これによれば、姚永昌はかつて三〇都六圖の經造を擔當していた時、納税期限が迫つたため妻の前夫が所有する魚地の地契を擔保に借金することを郭鳳に託した。郭鳳は事情を考慮して朱姓と契約を交わし借金した。ところが、姚永昌は返済に應じないため、郭鳳は自分の身に災いが及ぶのを畏れて訴え出た、という。姚永昌が地保であることは借金の返済拒否行動にどう影響していたか定かではないが、かつては經造であり錢糧業務に携わっていたこと、皂役という衙役と近い關

係であったなどが知られる。

【D】西山三二都一圖龜山に住む民人柴肅卿が同じ村に住む葉元寶に對し、葉が借金返済を迫り、鄰人の陳德福が結託して暴力を振るつたとして訴えた案件〔第一四、同治一〇年（一八七二）二月〕。柴の訴狀では三〇都となっているが、他の附屬文書では三二都になっている。ここでは唐心田という地保が登場する。柴の訴狀によれば、即刻唐心田に訴えて官に調査を求めたところ、彼は「陳德福は自分に理のないことを知っている。醫者に治療させることを望んでいるので、訴訟沙汰にするには及ばない」と勧めたため訴えを取り下げたのだが、その後醫者も藥も來ないのは明らかに兩者が結託して言葉巧みに騙したものであるという。唐心田はみずからの供述では「葉元寶と柴肅卿の紛争については、私はその場におりませんでした。陳の一件については私が柴に勧告したのがその原因だということを後から知りました。指示が遅れただけで、結託したわけではありません」と釋明している。ここでは地保は柴から疑われつつも同じ村に住む當事者間の調停役としての役割を演じていたことがわかる。

【E】東山二六都二圖翁巷に住む差役金奎が同じ村に住む湯正隆に對し、湯正隆が共謀して金奎の山地を盜賣したとして訴えた案件〔第一五、同治一〇年（一八七二）三月〕。訴狀のなかで湯正隆が同圖の地保滕正東を仲介にして二六都五圖大河口にある湯家傳來の山地を金奎の父金通達に對して抵當に入れて金を借りた事實を傳えている。その契約には滕正東に加えて沈明高と湯永祥の三名が原中として名を連ねている。

【F】東山二九都一二圖王衙前に住む胡張氏が朱永錫等數人に對し、彼らが衆を伴んで夫胡正祥に暴力を振るつたとして訴えた案件〔第一六、同治一〇年（一八七二）三月〕。地保秦信和は、「朱永錫らは皆私の管内に住んでおります。彼らが胡正祥に傷を負わせたときには、私は現場にいませんでした」との供述を行っている。

【G】後山二九都三圖楊灣に住む監生張文均が葉天如に對し、契買した房屋に葉天如の妾が勝手に找價を加えるのを許したとして訴えた案件〔第一九、同治一二年（一八七二）九月〕。ここで登場する地保印茂安は被告たちが出頭を拒む事情を太

湖廳に報告し、彼らを解送できない旨を釋明している。

【H】三〇都六圖の地保姚永昌等が姚順芳とその妻姚朱氏に對し、彼らが圖内の圩田の開濬を許さず泥で塞がってしまったことを訴えた案件〔第二〇、同治二年（一八七三）五月〕。姚永昌は車頭とよばれる四名の者と連名で業主の席義庄に訴え出るとともに太湖廳にも報告している。この姚永昌はCの地保と同一人物と思われる。

【I】三六都五圖の經造席洪升が、周國賓に對し、翁子隆の周餘生から當買し居住かつ納税している房屋を崇明から洞庭山に來た周國賓なる者が壞して賣却しようとしていることを報告した案件〔第二、同治二年（一八七三）九月〕。地保鄭少蘭は原差郭鳳とともに太湖廳に對し周國賓らが命令に従わない旨を報告するとともに周國賓がその土地にかかる税を、鄭少蘭に託して納入する旨を約束させた文書の保證人になっている。原差郭鳳はCの皂役と同一人物と思われる。

【J】西山三二都一圖龜山に住む寡婦張蔡氏が繼嗣張時華に對し、素行不良のために養子契約を破棄する旨を申し出た案件〔第三、同治二年（一八七三）九月〕。地保唐心田は、張時華とその父親が宜興へ採石に行っており期限通りに召喚できない旨を述べている。唐心田はDの地保と同一人物である。

【K】武山三〇都六圖に住む民人夏國祥が同じ村に住む芮茂興に對し、芮茂興が夏國祥の甥夏阿和に恨みを抱いて暴行したとして訴えた案件〔第三、光緒元年（一八七五）六月〕。ここで登場する地保として名前が擧がっている姚永昌はCおよびHの地保と同一人物と見てよい。夏國祥の訴狀によれば、芮茂興が夏國祥の桑葉を盗んだため捕えて彼を地保に引き渡したが、地保はえこひいきをして釋放してしまったため芮茂興は逆恨みをして暴力に及んだという。夏國祥はまた姚永昌たちがその現場を目撃しているという。姚永昌自身は、芮茂興を釋放したのは自分ではないこと、事件のあった時には既に眠っており、現場に駆けつけた時には芮茂興は逃げ去っていたので、夏阿和が殴られた状況は定かではないと供述している。

【L】前山二九都一三圖葉巷里に住む寡婦鄭吳氏等が同圖に住む夫の族兄鄭衡堂に對し、鄭衡堂が廟會費を横領したこ

とを訴えた案件〔第二四、光緒元年（一八七五）一月〕。ここで現れる地保の萬正芳、吳雲祥、萬春山の三名は訴訟の立會人として出頭している。

〔M〕前山二九都一二圖廟濱に住む民人萬順昌が岳母韓鄭氏に對し、萬順昌が上海に働きに行っている間に彼女が妻の韓氏に家財を持ち逃げさせたことを訴えた案件〔第二五、光緒二年（一八七六）一月〕。地保秦信和は萬順昌の妻がこれまでふしだらであつたことを供述し、萬順昌がもとより妻を凌虐し賣却しようとした事實がないことを保證する一文を作成している。秦がFの地保と同一人物であれば、前述の朱永錫等は前山二九都一一圖に住んでいたことが判明する。

〔N〕前山二九都一一圖馬家底に住む婦人陳金氏が王銀寶と袁錦奎の二人に對し、その夫陳順添を脅して自刎させたとのことで訴えた案件〔第二七、光緒二年（一八七六）五月〕。ここで登場する地保秦信和もまた前二者の地保と同一人物と思われる。秦信和は、「本月初更前、馬家底の郷民が私の家に来ていうには、圖民陳順添が上海で義和客棧から來た二人に無理やり迫まられて自刎したとのことでした。私は早速陳順添の家に行き、傷口の大きさを檢視しましたが、藥が塗られていたために傷の深さについてはわかりませんでした。……」との供述を行っている。

〔O〕西山三二都五圖六村に住む寡婦俞金氏が同じ村で煙館を開いて賭博を生業とする蔣春德に對し、彼が孫の俞鳴和の左腿を刀で傷つけたとのことで訴えた案件〔第二八、光緒二年（一八七六）五月〕。ここで登場する地保唐心田はDおよびJの西山三二都一圖を管轄する地保と同一人物か否かは不明であるが、彼自身「私の圖内で五月七日の夕刻、圖民俞鳴和が蔣春德に傷を負わせた事件は郷民がそれぞれ目撃しています。事件が禍を遺すことを恐れたのでしよう。胡德和らは蔣春德を凶器と一緒に連行してきました。隠匿するつもりはなく、速やかに報告する次第です」との旨の上申書を残している。また事件の起こった時はその場にいなかったのによくわからないこと、四月二一日のもめ事については自分も耳にしているが目撃したわけではないことなどを供述している。さらに俞鳴和が理由もなく蔣春德の奥に入り込み、その妻と親しくして蔣春德に奸情を疑われたのは俞鳴和もまたよろしくないので、以後前轍を踏まない旨の保證書を族人とと思われる

俞勝高と連名で作成している。

【P】正二品官葉長藻の家屬葉升が同じ村に住む惡棍周錦祥に對し、周が後山二九都三圖楊灣村にあり施寶發に床屋として貸していた店の椅子や机を壊したかどで訴えた案件〔第二九、光緒二年（一八七六）五月〕。訴狀によれば、三圖の地保印茂安は破壊された器物や現場に遺された石について既に目撃しており、周錦祥の不法ぶりが今に始まったものではないことを早くから熟知しているという。印茂安自身の供述には、「五月八日の夕暮れ時において周錦祥がどのように店を壊したのか、最初からその場にいたわけではないのでわかりません。その後施寶發が私を訪ねてきたので店に行き、そこではじめて器物が破壊されていることを見ました。周錦祥がやったものです」と述べられている。印茂安はさらにまた周錦祥が答責を受けた後も管理下に置いて取り締まることの保證書を廳に提出している。地保印茂安はGにも登場する。

【Q】西山三二都九圖前堡の民人ト坤元が同村に住む馬客方に對し、船戸と結託してトの妻を誘拐隠匿したかどで訴えた案件〔第三〇、光緒二年（一八七六）一月〕。西山の地保馬士青の供述には「本年一〇月内にト坤元が我家に來て、妻が失踪したが同村の馬客方に誘拐隠匿されたとの噂があり私に捜査するよう頼みました。私は馬客方が三山に轉居してしまつたので私の管轄外であると言いました。一〇月末、馬の妻が病で歸っていると聞きました。そこで前のことを思い出し調査しましたが、馬の家にトの妻がいる形跡はありませんでした。ひょっとするとトはその事實を知っていたのかもしれない」とある。

【R】前山二六圖殿前の寡婦芮王氏が鷄山に住む陸永才に對し、陸が契約に反して欠租しているかどで陸を訴えた案件〔第三二、光緒二年（一八七六）一月〕。地保夏國堂は「欠租を返済するよう説得しましたが陸は應じませんでした。彼は行動がわからず、評判も悪いので、放っておくと逃げてしまいます」と供述している。

右の一八件の訴訟文書から得られる洞庭山地方の地保についての情報は以上である。『太湖廳檔案』にはこのほか【S】前後および三山の經造に徵稅原簿に基づく冊串單簿への記入を通達したり、銀錢比價につき前後山の地保に揭示・監督を

命じたりした署太湖同知傅懷祖の文書〔第一、光緒八年（一八八二）、〔T〕白浮頭等の所の水草を刈って匪船の來往を防止する監督を各地保に命じた太湖同知陳章錫の諭文〔第八一、光緒十二年（一八八六）一〇月〕、〔U〕沈正興等八名の地保の實名が示された同じく太湖同知陳章錫の各通達書〔第八一三七七、光緒二十三年（一八八七）七月〕、〔V〕度々登場する秦信和をはじめとする六名の地保が名を連ねている林芝鄉の筆據〔第九一、咸豐二〇年（一八六〇）一〇月〕、〔W〕三山の圖董秦景福が地保吳紫塘と連名で提出した盜賊取締りのための要望書〔第九二、同治一〇年（一八七二）五月〕、〔X〕地保周正和と經造陶正裕の兩名が中人となっている二九都六圖の絕賣文契一張〔第一〇、同治八年（一八六九）二月〕などがある。

以上の『太湖廳檔案』が傳える地保の實像はおよそ次のようなものである。まず、地保の鄉村における業務にどのようなものがあつたのか。第一は警察業務である。事件を起こした犯人が彼のもとに連行されたため、場合によっては彼の判斷のもとに釋放することもあつたが、大抵の場合は官に報告する義務を負つた。自殺死體の檢視などもその業務に含まれていた。第二は錢糧管理業務である。鄉民の毎年の納稅額を掌握しているのは彼らの他にはいなかったのである。ここでいう經造は文面から判斷される限り徵稅簿を管理し納稅戸に納入稅額を告知する錢糧業務を專管する鄉村役のように見え、地保とはその職能が區別されている記事もあるが、地保がかつて經造であつたり、同時期に經造であつたりしたことを考えれば、地保と經造とは必ずしも境界が明確ではなく、その意味で地保が錢糧業務に關與することは十分ありえたものと思われる。第三は鄉村内における調停や契約の際の保證など、當事者間の橋渡しを行う業務である。事件の證人として召喚されたり、被告を裁判に出頭させたり、訴訟の取り下げを勸告したり、土地賣買や養子縁組の際の中人になつたりと、多様な役割を擔っている。第四は鄉村内における水利の監督である。圖内の圩田の管理に責任の一半を負つていた。このほか鄉村内の庶務全般に従事していたことが知られる。次に地保とはどんな人閒だったのか。地保は一つの圖を管理し、その圖の誰かが事件に關係する時には官から召喚され證人として供述しなければならぬ役割を擔つた。供述の中では、その事件を目撃している場合とその場に居合わせていない場合とが半ばしているが、それは事件を目撃できるほど近

くに居住していることを意味している。それゆえ、彼らは圖内の郷民に關しては單に名前のみならず、その人柄や性格まで熟知していたし、事件が起こるとすぐに郷民の來訪を受ける存在でもあった。東山では翁氏、席氏、鄭氏、嚴氏の四氏が長期存續の名門宗族であったといわれるが、ここで現れる地保の姓を見る限り、その出身者はほとんどいない。また、署名には例外なく「、」ないしは「十」が用いられ、花押を用いた者は一人としていない。以上の點による限り、地保を擔當したものは他の者と同様に同じ圖内に住む一般的な郷民であった蓋然性が高い。

『太湖廳檔案』が傳える洞庭山地方の地保の實態は地保の新たなイメージを我々に提供している。すなわち、ここで見る限り、地保は地域住民をひたすら陋規需索の對象と見なし、常に彼らと對立關係にあったというよりはむしろ地域社會の多種多様な用件に頻繁に驅り出され、地域住民のために奔走してその利益を代表する役割を演じていたという印象をぬぐえない。もちろん限られた地域の限られた史料に基づく情報には制約がある。しかし、そこには地方志などを通じて得たこれまでのものとは異なる地保像が展開されている。そして恐らくは、乾隆期の地總もまた基本的にこれと系統を同じくする鄉村役であったと判斷される。洞庭山地方の地總（地保）が擔う業務は明代の里長役のそれに近いものであった。里長役との違いは、もはや輪番制を取らず、また助役公田や地域住民の醸金によってその活動基盤が經濟的に保證された專業職であったことである。明末清初の里甲制體制の解體とそれに伴う流動化傾向は洞庭山地方において秩序ある営みを極めて困難にしていた。一八世紀中頃においてその住民が現總廢止に伴う受け皿としての鄉村役に求めたものはかつて里甲制下の鄉村社會において十全に機能していた鄉村組織の再生、およびその結果としての安定への回歸ではなかったかと思われる。ただし、それは里甲制のように中央によって統制された組織にあらず、むしろ統制できないことを前提に鄉村社會の實情に即した實態的慣行をそのまま行政が追認するといった組織として清朝國家の基層部分を支えていったのではなかろうか。

ところで、すでに明らかなように『太湖廳檔案』が示す情景は、主として同治八年—光緒二年（一八六九—一八七六）の



ものであり、『洞庭山禁革現總案』に示された乾隆中期からほぼ一〇〇年の隔たりがある。また、地總の名稱もいつしか地保に変わってしまった。しかし、洞庭山地方の郷民はこの一〇〇年の間一貫して鄉村業務を地總ないしは地保に委ねることによって鄉村組織を彼らなりに維持してきたわけであり、その體制は清末に至るまで基本的に變化することなく繼續されていったものと考ええる。加えて『太湖廳檔案』が發行された時期は、ちょうど江蘇巡撫丁日昌による財政改革が實施され、「それまでの州縣の行政經費が陋規に依存していた體制を見直し、胥役からの需索を糧戸層への需索で補填していた地保らの陋規需索の禁止が圖られ、あわせて地保に代わって紳士層の末端地方行政への參畫が模索された」といわれる時期に重なる。確かに『太湖廳檔案』の一部には光緒年間において洞庭山地方の紳董もしくは董事と稱する人物たちが連名で太湖廳に提訴した文書が何枚か残されているが、ただそれとは別個なものとして地保は同時期においても鄉村社會に固有の役割を演じていたのであり、洞庭山地方の鄉村組織は、『太湖廳檔案』に依據するかぎりでは、そうした上からの改革如何にかかわらず變化することなく、かつ安定的に機能し續けていたように感じるのである。

## おわりに

本稿では政書、地方志、そして檔案という三種の性質が異なるものの同一地域について論じた地方文獻を用いて清代における蘇州郊外の洞庭山地方にあって里甲制解體後の鄉村役がどのような社會組織として機能し、かつ存続したかについて不十分ながら考察した。この作業を通して得た結論は前節ですでに述べたため、ここでは地方文獻についての私見を若干述べて締めくくりとした。

まず、檔案史料とは何かについて考える。檔案そのものの意味は保存書類といったものであるが、史料として考えた場合、それは實際の行政事務の中で交わされた文書であり、書き手がそれを後世に傳えて何がしかの評価を期待する意圖のない、そういった意味でのいわゆる「生の史料」であるといえる。その點においては中國で歴代刊行されてきた官撰・

私撰の史書とはその史料の性質が大いに異なる。『洞庭山禁革現總案』に收められた文書群は印刷されており、不特定多数による閲覧を目的に編纂・刊行されたものである点ではもちろん檔案ではない。しかし、實際の行政事務の中で交わされた文書をはば未整理のまま掲載している点では廣義における檔案史料といえるかもしれない。政書というジャンルに分類される文獻の中にはそうした形式による類書がいくつか見られるが、それらは從來十分に活用されてきたとはいえない。刊本中における檔案史料のなかに改めて注目する必要があると感じる。

地方志については、それが地方文獻として必ずしも萬能の史料でないことを留意すべきである。すでに明らかにしたように、府志や縣志の場合、その治下における郷村の個別事情に即した内容がそのまま述べられているとは限らず、慎重な史料考證を経ない無限定な引用は慎まねばならない。その一方で地域に強い關心を持ち地域に密着した取材に基づいて著した地方志ないし地方志的なものは重要である。史料としての評價は、編者の在地におけるヒトとモノへの關心の深さとそれに規定された地方文獻―檔案の活用度によって玉も石にもなるのであり、地方志もまた檔案史料と無縁ではありえない。

最後に檔案そのものに即していえば、奏摺もまた地方文獻としては金科玉條の史料ではない。郷村に獨自の情報源を持たない高級地方官僚たちの郷村についての報告は時として具體性を缺くことがあり、膨大な件数を誇る檔案も單に「牛が汗をかくだけ」に終わってしまうことがないわけではない。その点、地方檔案は爲政者の事情の如何にかかわらず地方行政の手續きをそのまま記録・保存している場合が多く、史料としての價值は相對的に高いといえよう。ただ、それが宿命であるとはいえず、いずれも所藏地が分散され、閲覧にも様々な制約を伴うため、残念なことによりまだ十分活用されるに至っていないのが現状である。

清代の郷村組織についての實證研究は、これらの地方文獻が提供する斷片の中から珠玉の記事を丹念に選取り、それらを繋げて復元していくことが必要であり、それによってはじめて郷村組織はその本當の姿を少しずつ見せてくるのでは

ないか。その意味では文献を用いた中國鄉村社會史研究はようやく端緒にいたばかりなのである。これもまた、本稿で得た結論の一つといえよう。

## 註

- (1) 『清國行政法』第一巻下、一二三—一二九頁。
- (2) 『清國行政法』第一巻下、一二九—一二三頁。
- (3) 清代の鄉村組織を論じた代表的な研究に、Hsiao Kung-chuan, *Rural China: Imperial Control in the Nineteenth Century*, Seattle and London, 1960. があり、日本の研究では、一九六三—四四年に公にされた佐伯富「清代の里書」および「清代の郷約・地保について」(ともに佐伯富『中國史研究』第二、東洋史研究會、一九七一年、所収)があるが、その後の研究はあまりない。最近、山本進氏が「陋規需索・規禮饋送體系に依據していた地方行政經費調達システムが一九世紀に各省督撫によって裁革され省レベルでの地方財政が形成されていく」という持論の一環として鄉村役を位置づける試みを行っているが(山本進「清代江南の地保」『社會經濟史學』六一巻五號、一九九六年)、検討する餘地もある。
- (4) 民國『吳縣志』卷二二上、鄉鎮三、輿地考、によれば、吳縣の二六都から三〇都までが洞庭東山の管轄であり、三二都から三八都までが洞庭西山の管轄であったが(三二都は太湖に没入して現存しないという)、雍正三年(一七三三)に太湖水利同知を東山に移駐し、乾隆八年(一七四三)に撫民同知としたことにより、洞庭山東西の二六都—三八都の他、
- 一八都と二五都を加えて太湖廳の管轄に置いたという。また、光緒三〇年(一九〇四)には蘇州府管糧通判を靖湖廳とし、洞庭西山に置く三二都から三八都のうち三六都を除く六都をその管轄に置いたと述べている。
- (5) 洞庭東山について記した最近の著作に、薛利華『洞庭東山掌故』吳縣、一九九七年、があり、新編地方志に『洞庭東山志』上海、上海人民出版社、一九九一年、がある。また、當地を対象にした研究に、井上徹「宗族普及の側面—江蘇洞庭東山を対象にして—」『中國—社會と文化』一三號、一九九八年(のち井上徹『宗族普遍化に關する研究』科學研究費研究成果報告書、一九九九年、所収)がある。
- (6) 『洞庭山禁革現總碑案』には碑文として「遵奉旨憲禁革現總碑」「洞庭西山禁革現總碑」「洞庭東山禁革現總碑」の三つの碑文が收められているが、花口は「洞庭西山禁革現總碑案」「洞庭山禁革現總碑」と一定ではない。
- (7) 『中國古籍善本書目』史部、上海、上海古籍出版社、一九九三年、一三六頁、に「洞庭山禁革現總案一卷、禁革現總碑案一卷、清乾隆刻本」とあり、復旦大學圖書館のみの藏書になっている。なお、史料の一部閲覧に際して津田芳郎・岩間一弘兩氏の協力を得たことに感謝する。

(8) 乾隆『蘇州府志』卷一一、田賦四、徭役。

(9) 乾隆『江南通志』卷七六、食貨志、徭役。

(10) 『洞庭山禁革現總碑案』卷一、遵奉旨憲禁革現總碑。

(11) 『洞庭山禁革現總碑案』卷一、洞庭西山禁革現總碑。

(12) 『洞庭山禁革現總案』卷一、吳縣洞庭西山糧里士民鳳鳴徵等呈爲積弊復萌環籲示禁永除民害事。

(13) 道光『蘇州府志』卷一〇、田賦三、徭役。

(14) 版圖順莊法については、山本英史「均田均役法より順莊法に至る一過程―清初における吳江・震澤兩縣の場合―」『山口大學文學會志』三二卷、一九八一年、また、岩井茂樹「江蘇省における版圖の法と徵稅機構」明清史夏合宿の會報告レシメ、一九九八年、参照。

(15) 同治『蘇州府志』卷一三、田賦二、徭役。

(16) 例えば、民國『吳縣志』卷四九、田賦六、徭役、など。

(17) 光緒『常昭合志稿』卷七、戶口志、附徭役。

(18) 『清國行政法』第一卷下、一三〇頁。

(19) 地方志の史料の性質については山本英史「中國の地方志と民衆史」神奈川大學中國語學科編『中國民衆史への視座』新シノロジー・歴史篇、東方書店、一九九八年、所收、参照。

(20) 薛利華「金友理與《太湖備考》」『蘇州日報』一九九四年二月二〇日（薛前掲書所收）。

(21) 『太湖備考』卷五、田賦、附東西兩山禁革當年現總碑。

(22) 前掲『洞庭東山志』歷代金石目附待訪金石目表に「洞庭東山糧里碑」なる名があり、雍正四年の碑が現存する可能性を示唆している（二五二頁）。

(23) 『太湖備考』卷一六、雜記、歷代役法之弊。

(24) 『太湖備考』卷五、田賦、附助役公田。また、附東山二十八都二圖貼役田三十畝。

(25) 乾隆『吳江縣志』卷一六、賦役五、徭役。この一文については既に岩井茂樹氏による譯文がある。岩井前掲論文八頁、参照。

(26) 光緒『吳江縣續志』卷一一、賦役四、徭役、附禁革經造。

(27) 光緒『無錫金匱縣志』卷一一、徭役。山本進前掲論文三八頁。

(28) 光緒『嘉定縣志』卷四、賦役志中、役法沿革。

(29) Hsiao, op. cit. p. 63-68. 村松祐次「近代江南の租稅

中國地主制度の研究」東京大學出版會、一九七〇年、三六五―三六六頁。

(30) 佐伯前掲書三七七頁。

(31) 山本進前掲論文四七頁。

(32) 國立國會圖書館編『國立國會圖書館漢籍目錄』一九八七年、史部、政書類、邦計之屬。

(33) 夫馬進「國會圖書館藏太湖廳檔案に見る訴訟と裁判の實際―その初歩的知見―」永田英正編『中國出土文字資料の基礎的研究』科學研究費研究成果報告書、一九九三年。

(34) 清代の檔案については、中國第一歷史檔案館編『中國第一歷史檔案館藏檔案概述』北京、檔案出版社、一九八五年、倪道善『明清檔案概論』成都、四川大學出版社、一九九〇年、馮爾康『清史史料學』臺北、臺灣商務印書館、一九九三年、秦國經『中華明清珍檔指南』北京、人民出版社、一九九四

年、中國第一歴史檔案館編『明清檔案與歷史研究論文選』北京、國際文化出版公司、一九九五年、等参照。

- (35) 一八類とは、①内政、②外交、③軍務、④財政、⑤農業、⑥水利、⑦工業、⑧商業貿易、⑨交通運輸、⑩工程、⑪文教、⑫法律、⑬民族事務、⑭宗教事務、⑮天文地理、⑯鎮壓革命運動、⑰帝國主義侵略、⑱總合、をいい、内政はさらに「官制」「職官」「保警」「禮儀」「賑濟」「戊戌政變」「籌備立憲」「洋務運動」「文書檔案」の九類に分けられている。

- (36) 『宮中檔乾隆朝奏摺』臺北、國立故宮博物院、一九八二年。なお、臺北の故宮博物院全體の檔案については『國立故宮博物院清代文獻檔案總目』臺北、國立故宮博物院、一九八二年、参照。

- (37) 倪道善氏は北京の所藏數を『軍機處檔案』全體で約六七萬件としているが、軍機處錄副の數は擧げていない（倪前掲書三六頁）。約一八萬件という數は『乾隆朝漢文錄副奏摺地區檢索目錄』による。他方、臺北については、故宮博物院が

「軍機處奏摺錄副」として一八九、九〇六件を、乾隆朝として四七、一〇四件の數字を擧げている（前掲『國立故宮博物院清代文獻檔案總目』六一四―六一六頁）。

- (38) 『上諭檔』乾隆三十二年一〇月一日の上諭（中國第一歴史檔案館編『乾隆朝上諭檔』北京、檔案出版社、一九九一年、第三冊、一〇一―一〇二頁、所收）。

- (39) 『硃批奏摺』總督管理江蘇巡撫事務陳弘謀「奏爲欽奉上諭事」乾隆三二年七月一〇日（中國第一歴史檔案館藏）。

- (40) 中央檔案の中で鄉村役の實態を伝えることをより期待できるのは『內閣刑科題本』であろう。これは中國各地で發生した殺人・闘毆事件を中央に報告した檔案であり、官僚の價値觀に關わりなく勃發する犯罪について證言する鄉村役の言葉がそこに記録されている。しかし、その數量は膨大であるため、筆者はこれについてはまだ十分に検討していない。

- (41) 夫馬前掲論文。

- (42) 井上前掲書六七頁。

- (43) 山本進前掲論文。

this change of the levying way. The peasants got over the rapidly increasing expenses by participating in rural organizations, particularly qing-miao hui.

Qing-miao hui was an organization guarding harvest originally. But we can conjecture that it was gradually transformed into a cooperate association providing public services such as repairing village roads and temples in rural society while it was going to perform the task of levying chaiyao. In fact, this expanding function can also be found in the qing-miao hui of the 20th century. Based on rural surveys in the 20th century, qing-miao hui not only guarded harvest but also filled the budget shortage and labor of local governments.

## THE RURAL SYSTEM AND RURAL CLERKS IN THE QING PERIOD—A STUDY OF LOCAL DOCUMENTS ABOUT THE DONGTING SHAN 洞庭山 DISTRICT, SUZHOU 蘇州—

YAMAMOTO Eishi

This paper discusses how the rural clerks functioned and maintained the social system in the Dongting Shan district of Suzhou by referring to the three local documents, *Dongting Shan Jinge Xianzong An* 洞庭山禁革現總案, *Taihu Beikao* 太湖備考, and *Taihuting Dang-an* 太湖廳檔案.

In 1766 the local government prohibited the xianzong 現總, the rural clerk system that had many times been abolished but reestablished, and instead put the general affairs of rural communities into the hands of a new rural clerk system called dizong 地總. The dibao 地保 described in *Taihuting Dang-an* appear to have devoted themselves to the interests of the village people and do not suggest the traditional villain. In effect, such rural clerks had the same nature as the dizong.

What the people in the Dongting Shan district expected of the rural clerks in the mid-18th century was to revive the rural system and thus ensure stability. The local documents studied here demonstrate that the structure remained fundamentally unchanged until the end of the Qing period.